

「Neoplasms of the Digestive Tract

Imaging, Staging, and Management

Edited by Morton A. Meyers

癌研究会附属病院内科

丸 山 雅 一

本書の編集者である Morton A. Meyers 教授とは旧知の間柄である。6 月になって教授の献辞の入った本書を受け取り、時間の許す限りこれを読みながらこの種の本の内容の彼我の違いについてあれこれと考えていた。そして、正直な感想を添えて礼状をそろそろ書かなくてはと思っていた最中に、医学書院から書評執筆の依頼があった。

書評というものは、あたり障りなく、無難な書き方をすればよいことくらいは十分に心得ているつもりだが、親交のある教授のためにも今回は少し辛口に書いてみることに決めた。

Morton A. Meyers 教授は、その

肩書きにあるとおり、放射線科の教授であると同時に内科学の教授でもあり、消化器病学については深い経験と洞察力を持つ、米国では異色の人と言ってもよい存在である。昨年は、Distinguished Professor の称号を受けるなど、所属する State University of New York at Stony Brook では特別の尊称をもって遇されている。

教授は知日家であり、禅に興味を持って永平寺をいく度か訪ねたことがあるし、また、浮世絵の愛好家でもある。もっとも、Morton A. Meyers 教授の名は、わが国では、その名著「Dynamic Radiology of the Abdomen, Normal and Pathologic

Anatomy」(Springer-Verlag) の著者として、特に放射線科領域の人たちは周知である。この本は、1976 年に初版が発行されて以来、版を重ね、消化器放射線の画像診断のバイブルのごとき役割を果たしてきた。

さて、今度世に出た「Neoplasms of the Digestive Tract」であるが、Morton A. Meyers 教授は、単に本の編集者としてではなく、第 1 章「General Considerations」に加えて、以下 11 章のすべてをわたって overview を執筆している。この事実からして、筆者は、本書は教授が渾身の力を込めて世に問う畢生の大作であると思う。消化管から肝・胆・膵に至る総合的な画像診断についての

overview を 1 人で執筆する仕事は教授がいかに人並みはずれた能力の持ち主であろうと、そう簡単にさせる業ではない。秀でた能力の持ち主が長い時間の苦闘の末にようやく可能になることではないか。引用されている文献の数をみるだけでも、あの多忙な教授の努力のあとは歴然としている。また、この overview には新旧の知見を含めて必要なことが網羅されており、これを読むだけでも啓発されること大である。筆者は、教授の温厚な風貌の中に秘められた類いまれな精神力を今更ながら感じとった次第である。

この本の書評としては、教授のその強靱な意志の力を感じてもらうことに尽きる。そして、本の編集者とはこうあらねばならないという理想に近い状態を Morton A. Meyers 教授は具現していると思う。顰蹙を買うことを承知で、また、わが身にもはね返ってくることも覚悟して書くが、それに比べてわが国でその立場にある人たちはどうであろうか。編集者の存在意義とは執筆者を決めるだけのものではなく、その人の思想を語り、その本の目指すところを指し示す存在であるところに存在するものでなければならないのではないか。そのことを本書を手にしたすべての読者に感じてもらいたいものだ。

そして、Morton A. Meyers 教授のそのような思想性と心意気を肌にかけている筆者としては、腑甲斐ない執筆者がいることにある種の空虚さを感じるとともに、なぜなのだろうかと疑問を持たざるを得ない。もっとも、並みの執筆者が Morton A. Meyers という巨人のような存在に圧倒されてしまったと言えればそれ

までなのかもしれないが、

例えば、第 20 章「Diagnosis of Colorectal Cancer by Conventional Radiology」の中で、Early carcinoma の項目はわずか 4 行、しかも、“Early carcinoma usually presents as a polypoid mass. The radiologic diagnosis of small polyps is mainly an exercise in the detection of small polyps, as there are no reliable distinguishing features of early malignancy.”とあり、引用文献は 1982 年の「Radiology」に発表されたものを拠り所としている。

執筆している本人がそのように信じているのであれば、何をか言わんやであるが、前章の overview では Morton A. Meyers 教授が日本人の文献を引用して平坦・陥凹型の病変に言及しているのである。また、平坦・陥凹型に限らず、X 線診断の進歩については教科書的に書き残しておかなければならないことは日本人の業績に限らずとも少なからずあるのである。

日本人の仕事を故意に無視しているのか、あるいはまた、単に不勉強であるのか、真実は不明だが、編者の心情を思いやると残念至極としか言いようがない。執筆者に対する原稿依頼が 5 年も前になされたとしても、大腸早期癌の診断については日本の仕事は英文で少なからず発表されているはずであるから、なぜと思うのである。

大腸癌は、米国では日本の胃癌に匹敵するか、それ以上の罹患率、死亡率を呈する疾患であることを考慮すれば、早期癌の診断についてはもう少し詳細な記載を期待するのは筆者だけではあるまい。また、conventional radiology の存在価値を声

高に強調しているのは米国の放射線医であることも、この際、非常に重要なことである。

また、せっかく日本の早期胃癌例を載せているのに、その説明が不十分なものがある (Fig. 11-3)。この例は、III 型早期癌と解説されているが、日本では IIc 型、それも胃底腺領域の IIc 型である。したがって、その深達度は sm であろう。もし、これが III 型であるならば、間違いなく早期癌類似進行癌である。

いくら上部消化管の conventional radiology が米国では衰微の一途にあるとは言え、このような一知半解のごとき記載は寂しい限りである。そして、CT, US, MRI などについての記載がしっかりとしており、更に、EUS による staging など新しい領域のことについては十分に配慮ある書き方がなされているだけにそのことが対照的に映る。

以上、筆者は少し辛口の批判も書いたが、総じて見れば、この本は、現代米国の画像診断の高い水準を認識するとともに、その傾向を知るには不可欠の情報源であると思う。そして、同時に、消化管の早期癌の診断に関する日本の仕事は、なぜ、米国の教科書的な記載の中に引用されることが少ないのか、ということを変えて考えてみる必要があるのではないか。通信情報のメディアがこれほど発達しても、臨床医学とは所詮ローカルなものなのか、あるいは、われわれの書き方が悪いのかということも残された検討課題である。

● 588 pp 900 illvs. 25 in full color, Lippincott-Williams & Wilkins, 1998 定価 (本体 36,050 円 + 税)